

東洋拓殖移民の帰国をめぐる同窓会の役割

——禾湖里尋常高等小学校同窓会を事例に——

佐藤 量

はじめに

本稿では、東洋拓殖移民の個々人の移動体験から、移住と帰国、そして戦後生活に至る連続性を考察する。とりわけ東拓移民の子弟が通った学校同窓会に注目する。外地の学校は1945年以降廃校となったことで、戦後の同窓会の結び付きはきわめて強い。「故郷喪失」や植民地体験の記憶は同窓会によって保存され集合化されてゆく。東洋拓殖移民の記憶もまた当地の学校同窓会によって形成されている。本稿では、全羅北道の禾湖里尋常高等小学校同窓会を事例に、東拓移民の移住体験と戦後生活の関係性を考える。

東拓移民個人に注目した研究はこれまで積極的になされてこなかった。河原典史氏、轟博志氏の歴史地理学的研究を嚆矢とする。しかし移住者本人のオーラルデータを対象にした研究はこれまでにない。本稿では、日本最大の東拓移民輩出地である高知県におけるフィールド調査にもとづき、当事者のインタビュー調査と、法務局における移住者の土地所有状況調査をふまえて、東拓移民の移住と帰国の連続性を追う。

研究対象としての同窓会は貴重な資料の宝庫でもある。同窓会の発行する同窓会誌は貴重な証言録であり、同窓会名簿は直接面会するための重要な住所録である。個人的に会うことが難しい人であっても同窓会を介することで会うことができたケースも多いように、同窓会からのアプローチの有効性と、記録に残されることのないオーラルデータの重要性を示す。

1. 東洋拓殖移民の同窓会

禾湖里尋常高等小学校

禾湖里尋常高等小学校は、全羅北道井邑郡龍北面にあった尋常小学校で、1913（大正2）年9月に設立された。『朝鮮学校要覧』によると、昭和2年当時学級数3、職員数4名（男女2名づつ）、総生徒数は77名であった。尋常科と高等科にわかれており、1年生から6年生までの尋常科は64名、現在の中学校に相当する高等科は13名であった。井邑郡にはほかに井邑尋常高等小学校と新泰仁尋常高等小学校があったが、いずれの学校も規模は



図1 禾湖里尋常高等小学校写真（N氏提供）

小さく同数程度の生徒数であった。

右の写真は1945（昭和20）年初頭の禾湖里尋常高等小学校の全校生徒の写真である。写真の場面は高等科の生徒が出兵してゆくときの記念写真である。後ろに見える校舎の数は一棟で、教室間の間仕切りはすべて取り外すことができ、寒い冬場には広い体育館となった。煙突から煙が立ち上っているが、寒い禾湖里であっても教室内は暖かく快適であったという。禾湖里に移住した東拓移民の子弟は、この小学校に通っていた。

禾湖里尋常高等小学校同窓会「禾湖里会」

この写真は、1944（平成6）年に開催された同窓会の集合写真である。彼らは東洋拓殖移民として高知県から朝鮮半島に渡り、そこで生まれ育った2世たちである。移住先の全羅北道井邑郡龍北面禾湖里で暮らしていた彼らは、当地にあった禾湖里尋常高等小学校で学んでいた。彼らはその卒業生であり、この会合は同窓会の風景である。

写真にある「禾湖里会」とは、移住先の禾湖里から郷里の高知に引揚げた人々を中心に、なりって形成された同郷者集団で、そのなかには禾湖里尋常高等小学校同窓会も含まれ、「禾湖里会」は現在でも運営されている。

一見するとこの写真はごく普通の同窓会風景であるが、しかしこの場に集まったメンバーの背景はさまざまであった。郷里高知に引揚げて以来ずっと住んでいる人、高知に引揚げたものの別の場所に移っていった人、韓国から同窓会に参加する韓国人同窓生など多様である。それは同時に東拓移民の移住と帰国をめぐる過程におけるそれぞれの移動体験が、戦後生活に影響を与えていることを示しているだろう。さまざまな個別の体験を、聞き取り調査から分析してゆく。



図2 同窓会「禾湖里会」の風景（N氏提供）

2. 同窓生の帰国と人間関係

高知に戻った人々

郷里の高知に戻って現在でも高知で暮らしている東拓移民は多い。同窓会写真中央に座っているY氏もその一人だ。Y氏は1929（昭和4）年朝鮮全羅北道金堤郡扶梁面大坪里に生まれる。両親と5人家族であった。朝鮮半島への移住前のY家は、高知県川内村大内で暮らしていた。この川内村はたくさんの東拓移民を輩出している土地で、移住先でも皆近くで暮らしていた。川内村のすぐわきを仁淀川という大きな河川が流れており、山がちな地形であるため基本的に平地が狭いため農地は少ないものの、Y家は農業を生業として暮らしていた。Y氏の両親が朝鮮に渡ったのは1913（大正2）年の第3回東拓移民のときである。渡鮮してから15年後にY氏が生まれて、朝鮮での生活は3人暮らしであった。

朝鮮でのY家の生活は、移住前に比べてはるかに裕福だった。Y家には井戸があり、近所の朝鮮人もこの井戸を生活用水として毎日利用していた。大坪里の冬は寒く、朝晩は井戸が凍るために遅い時間に汲みに来ていた。井戸を共同で使用していたため、朝鮮人から朝鮮の着物などをもらった。お盆や正月にはおもちやこんにゃくなど、朝鮮の人からたくさんのもをもらった。母親が朝鮮語を話せたため、近所付き合いが可能で、終戦時に朝鮮の人々がおにぎりなどを作ってくれた。「Y氏は日本に帰ってもいいが、母親は残ってほしい」と朝鮮の人々にいわれたという。母親は30代～40代を朝鮮で過ごしており、現地で学校に通ったわけではない。おそらく独学で朝鮮語を学び、近所の朝鮮人社会と関係性を持っていたと考えられる。

東拓移民が移り住んだ農村地区では、東拓会社が朝鮮人の開墾していた土地を買収して日本人に分配していたように、日本人が新しく切り開いたわけではない。そのため日本人と朝鮮人の「混住型」の生活スタイルとなっていたという¹⁾。したがって母親と朝鮮人が近所付き合いできる空間ではあったが、朝鮮語を覚えて朝鮮人と交流を持っていた日本人はほとんどいなかっただろう。

Y家は朝鮮での生業として農業を営んでいた。田植えと稲刈りの季節には朝鮮人の労働者が多数働いていた。そのころになるとどこからともなくやってくる出稼ぎ労働者たち。棒に小さな荷物をくくりつけて、雇ってくれと訪ねてくるらしい。Y家の向いに朝鮮人の医者がいたが、あるとき医者が引越して、空き家をY家が買い取った。そこに出稼ぎ労働者を住ませた。大所帯だった。彼らのご飯は朝鮮人女性が作っていた。男たちと違って彼女たちは住みこみではない。

Y氏は禾湖里尋常高等小学校を卒業後、裡里高等女学校に進学した。禾湖里と大坪里は隣町だったので小学校には家から通っていた。裡里高等女学校は「裡里」という町にあって、大坪里から汽車で1時間ほどの距離であった。Y氏は1942（昭和17）年に入学してそのまま終戦を迎える。終戦時は14歳であった。裡里高等女学校での生活は家族と離れて寄宿舎生活だった。寄宿舎の部屋は5～6人の共同生活で、1年生から4年生まで一緒に生活した。上級生が下級生の面倒をみていた。当時はすでに配給制であり、寄宿舎での食事はあまり十分ではなく、おなかいっぱいご飯を食べたことはなかった。しかし毎週のように母親がお弁当を持ってやってきてくれた。お重に盛られたたくさんのごちそうはY氏だけでなく、同部屋の女学生にとっても楽しみであった。女学校での生活はほぼ勤労奉仕に明け暮れる。朝からずっと勤労奉仕で、宿題がどっさりであるため、友達と遊ぶことはあまりない。朝鮮人同級生と遊んだことはなかった。朝鮮人同級生たちは、彼女たち同士でかたまっていたし、みんな汽車で通っていたため寄宿舎暮らしの日本人とは授業後の生活が異なっていた。

Y氏の引揚げは1945（昭和20）年10月だった。釜山から仙崎へ船で渡りその後高知に戻った。このときに頼りになったのが郷里に残っていた祖父と叔父であった。叔父はしばらく禾湖里で暮らしていたが、足をけがして農作業ができなくなったため終戦前に朝鮮から川内村へ帰国し公務員になっていた。したがって祖父と叔父が川内村にいたため、Y家は川内村で生活を始めることができた。Y氏はその後、隣町のいの町で公務員になり、現在でもいの町で暮らしている。

高知に留まらなかった（留まれなかった）人々

高知に戻って定着した人が多い中で、その後郷里から離れてゆく人々もいた。仕事や結婚、進学などで離れる人はいるものの、親族の多くが川内村から離れる例もあった。それがT家の人々である。同窓会の写真最上段左端に立つT氏は、このときはじめて同窓会に出席した。出席者同様、禾湖里尋常高等小学校の卒業生であるT氏は、多くの同窓生と実に50年ぶりの再会であった。T氏はT家一族で川内村大内に戻ったものの、その後農水省の役人となって郷里を離れ福岡で暮らしていた。T氏には兄がいるが、兄は千葉在住であり同じく川内村から離れており、同窓会にはこれまで出席していない。この2人のT家兄弟は、共にすでに亡くなっており禾湖里での生活を聞くことができるT家の人々はもういない。

T家が禾湖里へ移住したのは、Y氏たちと同じ1913（大正2）年の第3回東洋拓殖移民で、T家兄弟の祖父と父である。T家は川内村でも地主であったが、禾湖里でも大地主となって「T農場」などと呼ばれるほど広大な土地を所有していた²⁾。前述のY氏も「Tさんの家はとても立派だった」と記憶している。

しかしY氏から戦後のT家の話は聞くことがなかった。「Tさんの家の人たちとも同じ船で帰ってきたはずだけど、その後はあまり会うことはなかった。」という。同じ船で帰ってきたという記憶もあいまいだが、T家兄弟とは同じ禾湖里尋常高等小学校の同窓生で、同じ川内村にいるにもかかわらず記憶にとどまることはなかった。Y氏の話では、帰国後のT家は川内村のM氏³⁾のところに入ったん留まり、その後隣町の須崎市に移ったという。

またT家兄弟の兄は、地主の長兄にもかかわらず養子にでている。Y氏によれば、養子先の名前は土佐市に比較的多いようで、「その地方の家に入られたのでは」ということであったが定かではない。今後はT家一族の方々とお会いして話を聞く機会を設けたいと考えているが、いずれにしてもT家の長兄が養子となったり、川内村から須崎市に移ったりとT家をとりまくディアスポラ的な戦後の状況が聞き取り調査から浮かび上がってきた。

同窓会に参加する韓国人

同窓会の写真右端に映っている男性は韓国人である。この韓国人は現在の禾湖里の学校関係者で、かつての禾湖里に暮らしていた日本人たちと交流を持っている。このように植民地期に由来する国境を越えた同窓会の交流はさまざまな地域でみることができる。樺太、満洲、関東州、台湾、朝鮮、南洋など日本の統治地域にはかならず学校があり、多くの場合現地の裕福な家庭の子弟も日本人学校に通っていたような、日本人と交流を持つ現地住民がいた。こうした交流は、国家間の植民地支配／被支配の二項対立的図式にとどまらない関係性であった。彼らは植民地統治の歴史のなかではマイノリティであり、日本人に近い立場であったからこそ、戦後迫害を受ける体験も強いられることもあったが、彼らもまた植民地主義によって生み出された人々として認識される必要があるだろう。

日本人と朝鮮の人々が「混住」していた禾湖里では、それぞれの民族が顔を合わせる機会が多かった。同窓会の写真左下付近に写るN氏もまた、近所に住んでいた朝鮮人と友人関係にあった。N氏は1936（昭和11）年朝鮮全羅北道井邑郡龍北面禾湖里生まれ。実の両親はY家一族で3歳のときにN家の養子となった。したがって前述のY氏とは親戚関係にある。Y家とN家は、

移住前も帰国後も近い関係であったようで、現在でも両家は近所である。Y家もN家とともに1913（大正2）年に朝鮮に移住している。禾湖里では農業を営み、農閑期には製紙業（障子）を営んでいた。両家とも裕福な生活を送っていた。禾湖里での生活は朝鮮人の給仕が世話をしてくれたという。女性の使用人は通っていたが、男性の使用人は住み込みで働いていた。帰ってきてからは朝鮮のように豊かな生活ができなかった。天と地ほど生活レベルは違ったという。

N氏の祖父は引揚げ後も農業をする。79歳で亡くなる。祖父も父も朝鮮ではほとんど仕事をしていない。仕事は韓国人がしていて、本人は働いていない。家には韓国人が5、6人いた。忙しい時は働くが、普段は働かない。お祖父さんもお父さんも遊んで暮らしていたという。田植え、稲刈りなど人をたくさん雇ってしていた。

このN家の裏には朝鮮人が住んでいた。C氏である。N氏よりも5、6歳年上で、C氏とN氏は1990年代後半から文通を始める。きっかけは同窓会。同窓会で禾湖里を訪ねたときにこの朝鮮人がN氏のことを覚えていて、半世紀ぶりの再開を果たした。4、5年前。N氏宅に1回電話がかかってきた。親しくしていた。5、6歳年上。当時いっしょに遊んでいたわけではないけど、N氏の父親と付き合いがあったようで、息子のN氏のことを覚えていた。N氏は当時の記憶はない。彼の家は農業をやっていた。今は韓国でも生活レベルは上のほう。豊かの生活をしている。

9歳で終戦をむかえたN氏にとって朝鮮生活の政治的側面は記憶にはない。しかし裏の家の朝鮮人はN氏を覚えており懐かしさから文通をはじめている。当時子供だった両者だからこそ、大人たちの人間関係のように政治的で植民地主義的な関係性は希薄であったようだ。



図3 C氏（左）とN氏（右）

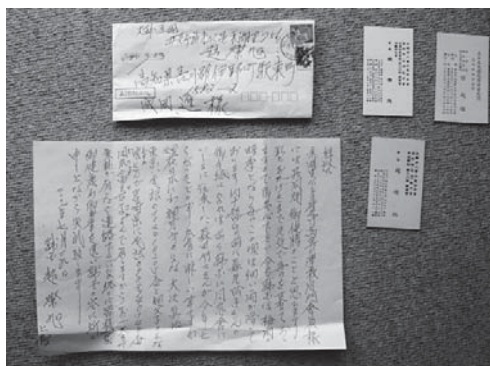


図4 C氏からN氏宛の手紙

同窓会だからわかること

同窓会に参加する人々の背景はさまざまであり、その人間関係は複雑に絡み合っている。同窓会では過去の記憶を形成するだけでなく、現在の人間関係も形成されており、過去と現在をつないでゆくように、同窓会は人々の関係性を分析するうえで非常に有効である。

『東拓移民名簿』を参照することによって移住者の輩出地と移住地を特定することが可能となったが、その移住者名簿には戸主の名前しか記されていないため、戸主以外の家族の動向までは知りえない。そこで同窓会にまつわる写真や名簿を参照することで、直接移住者に会う機会をえて、移住と帰国をめぐる生活レベルでの話を聞くことができた。同窓会を通して移住者

に接触することで、当事者たちのネットワークに触れることができ、移住と帰国をめぐる体験に由来する当事者たちの人間関係や生活を知ることができるだろう。人々の個別な体験が公の記録に残ることは稀であるが、しかし同窓会には大切に残されているのである。

3. 土地所有と「帰る場所」の関係性

戦前期の川内村土地台帳

同窓会の写真や証言から、東拓移民の戦後生活は人によって大きく異なっていた。では、郷里の高知に戻ってきて現在でも高知で暮らしている人と、そうではなくて別の場所に移っていった人とを分けているのはいったい何だろうか。移民たちの人間関係を複雑にしている要因は何だろうか。その理由の一端は、移住者の土地所有と大きく関係してくるだろう。戦前の移住前の土地所有、朝鮮での土地所有など、土地は人々の生活を支える基盤そのものである。本章では、東拓移民と土地所有の関係性について、とりわけ移住前の川内村における土地所有について分析してゆく。川内村における土地所有について、当事者のオーラルデータ高知県川内村大内の「土地台帳」をもとに分析する。2008年3月から2009年8月までに3回の高知調査を実施し、関係者へのインタビュー調査と、高知県法務局いの支局にて、1892（明治25）年から1926（大正10）年ころまでの川内村大内の土地台帳を閲覧複写する調査を実施した。



図5 旧川内村大内の風景（筆者撮影2009年8月）



図6 旧T家邸（筆者撮影2009年8月）

朝鮮での土地所有

植民地期朝鮮での土地所有については轟氏の研究に詳しい⁴⁾。朝鮮での土地所有は人によって大きく異なり、土地を積極的に拡大して大地主化する人もいれば、現状維持、もしくは撤退する人もいるなど様々であった。Y氏の「T家はとても立派だった」という言葉にあらわれているT家の土地所有状況を、轟氏は韓国に残されている土地台帳および地籍原図を活用して分析し、東洋拓殖移民の土地所有の多様性が明らかとなった⁵⁾。つまりY氏の証言通り、T家の大地主化は顕著で、他の移住者と比較しても大きく差があったということがわかる。轟氏の分析によるとT家は、1915、16年ころから朝鮮の土地を所有しはじめており、解放前には101筆もの土地を所有していた⁶⁾。

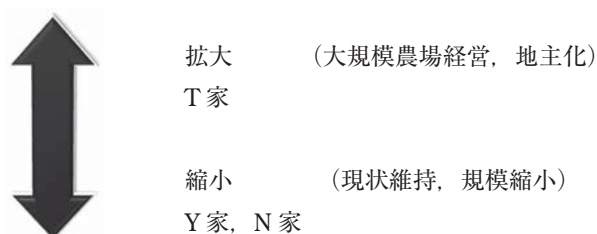


図7 移住後の土地所有面積の変化（轟氏作成資料の一部引用）

では、朝鮮におけるこのような土地所有の状況は、移住前の土地所有の状況とどのように関係しているだろうか。轟氏の研究を踏まえて、移住前の川内村におけるT家と、Y家、N家の1892（明治25）年から1926（大正10）年ごろの土地所有状況を分析した。

移住前のT家の土地所有

表1は、高知県法務局の支局の土地台帳調査から、T家の移住前の土地所有の状況を経年表記したものである。実に多くの土地を所有していたことがわかる。川内村でこれほどの土地を所有していたのはT家以外では、M氏くらいであるがM氏は一族で朝鮮に渡っていないため、T家ほど土地を売却していない。

表1ではT家所有の土地を、地目別に色分けして表記した。畑が黄色、田が緑色、宅地が赤色、山林が茶色、萱芝が紫色、薪炭がネズミ色、稲干場が水色である。全体的に畑、田の割合が多い。しかし図5のように川内村は山に囲まれた小さな集落であるため耕地面積は広くないので、炭や木材も生業としていたと考えられる。また、明治33年に多くの田畑を売却しているが、これはその年に仁淀川の洪水がおきて、河岸の堤防工事のために土地を提供したためだと思われる。

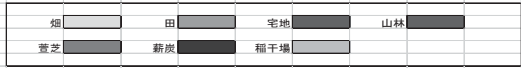
明治33年に大量の土地を売却していることを除いて、ほぼすべての土地は、大正5、6年を境に売却している。1916、1917（大正5、6）年を越えて所有している土地はわずかに4筆だ。T家一族が朝鮮に渡ったのは1913（大正2）年であることからすると、朝鮮での安定した生活を選択して郷里の土地を売却したことがうかがえる。1916、1917年に川内村の土地を売却している一方で、1915、16年ごろから朝鮮で土地を取得しはじめていることから、時間的な連続性がみてとれる。とりわけ、田、畑、山林だけでなく宅地も売却していることから、移住への決意のほどがあらわれているといえるだろう。

Y家・N家の土地所有

一方で、朝鮮での土地取得が「現状維持」派であったY家とN家の土地所有状況が表2である。表の上段がY家、下段がN家である。轟氏の分析によると⁷⁾、朝鮮でのY家は1923年に2筆、27年に5筆、29年に6筆、計13筆取得しているに留まる。N家は、1917年に1筆、21年に3筆、28年に3筆、32年に5筆、計12筆である。T家が朝鮮で100筆取得したと比べると大きく異なる。それと連動するように、移住前の土地所有もT家比べて圧倒的に少ないことがわかる。

表1 移住前のT家の土地所有面積の変化

字	地番	地目	明治25年 1892年	明治26年 1893年	明治27年 1894年	明治28年 1895年	明治29年 1896年	明治30年 1897年	明治31年 1898年	明治32年 1899年	明治33年 1900年	明治34年 1901年	明治35年 1902年	明治36年 1903年	明治37年 1904年	明治38年 1905年
寺屋敷	601-2	宅地														
シキノクボ	634-2	畑														
シキノクボ	635-2	畑														
シキノクボ	634-3	畑														
シキノクボ	635-3	畑														
シキノクボ	647-2	畑														
ヤシキ田	1424-2	田														
中山南平	329-一	薪炭														
ハンシニ	2345-イ	畑														
ヤシキ田	1428	畑														
エソエ	30-1	田														
シキノクボ	650	畑														
スノ内	361	田														
カヤ	679-1	宅地														
カイ越	96	薪炭														
スノ内	354	田														
ウソスケ	1097-ホ	畑														
ウソスケ	1116-リ	畑														
スノ内	356	田														
スノ内	358	田														
スノ内	359-イ	田														
スノ内	360	田														
トヌメ	433	畑														
ウソスケ	1102	畑														
スノ内	353	畑														
ヒワタハタ	1981	畑														
寺屋敷	601-1	宅地														
カイ越東分	126	畑														
ウソスケ	1121	畑														
ハキ原	58	田														
ハキ原	61	田														
赤三本原	311	田														
エソエ	31	稲干場														
ホキ	3368	畑														
長山田	169	露芝														
丸田	2846	畑														
生姜ノクボ	2909	田														
亀三谷	166-口	畑														
中塚	2733	稲干場														
カノ岳	3265	稲干場														
下角田	3297-1	稲干場														
亀三谷	164	畑														
竹ノ谷	1340-1	畑														
宗重	549	宅地														
ウソスケ	1097-口	畑														
ウソスケ	1116-ツ	畑														
ウソスケ	1120	畑														
シキノクボ	635-1	宅地														
ウソスケ	1118	畑														
ウソスケ	1122	畑														
アノ前	2616	田														
中山南平	2775	薪炭														
シキノクボ	647-1	田														
シキノクボ	649	畑														
シキノクボ	656-1	畑														
中山南平	348	薪炭														
中山北平東分	2217	薪炭														
宗重	551	畑														
宗重	552-1	田														
ツルイノ上	928	宅地														
ウソスケ	1097-イ	畑														
ウソスケ	1116-ル	畑														
ウソスケ	1124	畑														
中山北平西分	258	薪炭														
中山北平西分	259	薪炭														
ハンシニ	2345-ハ	畑														
アノ前	2609	田														
アノ前	2676	畑														
ムロヤシキ	785	畑														
中山北平東分	271	薪炭														
中山北平東分	274	薪炭														
中山南平	328-一	薪炭														
中山南平	328-口	畑														
中山南平	358	薪炭														
中山南平	335	薪炭														
ハツカシ	2205-口	田														
中シマ	3182	田														
ムクノ木	866-1	田														
ツルイノ上	929-イ	畑														
ツルイノ上	930	宅地														
大坪	1050	田														
宗重	555-1	田														
宗重	555-2	旧道式														
宗重	555-3	旧溝式														
宗重	575-1	田														
宗重	575-2	旧道式														
宗重	575-3	旧溝式														
ウソスケ	1097-ニ	畑														
ウソスケ	1116-マ	畑														
ホキ	3396	畑														
大ナロ	1850-甲-ア	畑														
大ナロ	1850-甲-シ	畑														
大ナロ	1857	畑														
立石	211	露芝														
中山南平	347	薪炭														
中山南平	336	薪炭														
中山南平	349	薪炭														
中山南平	359	薪炭														
宗重	550-1	畑														
宗重	550-3	畑														
ウソスケ	1116-フ	畑														
竹ノ内	1168	田														
シノハノ谷	1237	畑														
神主屋敷	2550-イ	宅地														
宗重	550-2	畑														
古井	220	畑														
古井	248-1	畑														
古井	248-3	畑														
古井	252-カ-1	畑														
古井	252-カ-4	畑														
古井	252-ヨ-4	畑														
亀三谷	1199	畑														
亀三谷西	1207	畑														
長山田	1263	畑														
古井	236	畑														
古井	241	畑														
ウソスケ	1119	畑														
カイ越	91	薪炭														
生姜ノクボ	2951	畑														



土地所有と「帰る場所」の関係性

移住前に多くの土地を売却しているT氏が朝鮮で多くの土地を購入し、移住前にわずかの土地しか売却していないY家は、朝鮮で土地を拡張しなかった。土地を売却する時期が移住したあとであることから、朝鮮での成功にかける思いの差異が、土地売買につながったといえるだろう。T家は朝鮮で多くの土地を取得し成功を取めたが、それは同時に故郷の土地を放棄した結果であり、「帰る場所」を喪失することにつながってゆく。一方でY家とN家は、川内村の多くの土地を売却せず朝鮮に移住した。いつかは帰ることを想定していたのか、故郷の土地も残し、朝鮮でも土地を拡張することはなかった。

おわりに

もともと川内村は豊かな土地ではなく、基盤産業であった製紙業も工業化によって衰退してゆく。村の脇をながれる仁淀川もたびたび氾濫し生活は安定していなかった。東拓移民の募集が出されたのはそのような時期であり、喧伝される朝鮮での生活は魅力的であったことだろう。産業の少ない川内村の人々にとって、換金できる財産は土地であった。土地を担保にして朝鮮での豊かな生活を選ぶかどうかは当事者の判断にゆだねられたが、その結果、多くを売却したものは富と引き換えに故郷を喪失することになり、土地を残したものには「帰る場所」があった。移住前の土地所有は、帰国後の生活にも大きく影響しているといえるだろう。東拓移民の個別な体験はさまざまであるが、その体験からは戦前と戦後をつなぐような、移住から帰国、戦後生活に至る一連の連続性が見えてくる。

帰国した東拓移民が戦後どのように生活していったのか、あまりに個人史すぎるゆえにほとんど資料が残されておらず、また関係者の多くが他界されている今となっては知ることは難しいが、それでも同窓会にはこうした記憶も、まだ留められている。これまでの調査では、T家一族の関係者に会う機会に恵まれていないが、今後も調査を継続して話を聞いてゆきたい。イ

表2 Y家(上)・N家(下)兄弟の土地所有

N・Eの土地所有			明治25年 1892年	明治26年 1893年	明治27年 1894年	明治28年 1895年	明治29年 1896年	明治30年 1897年	明治31年 1898年	明治32年 1899年	明治33年 1900年	明治34年 1901年	明治35年 1902年	明治36年 1903年
字	地番	地目												
野田	1005	田												
ムクノ木	869	宅地												
袋尻	241-イ-10	萱芝												
袋尻	241-イ-11	萱芝												
山ノ神	250-二	墓地												
長山田	1251	畑												
長山田	1285	畑												
新作田	1293	畑												
長山田	170-口	畑												
長山田	171-口	畑												
新作田	174-口	畑												
N・Rの土地所有			明治25年 1892年	明治26年 1893年	明治27年 1894年	明治28年 1895年	明治29年 1896年	明治30年 1897年	明治31年 1898年	明治32年 1899年	明治33年 1900年	明治34年 1901年	明治35年 1902年	明治36年 1903年
字	地番	地目												
新作田	1293	畑												

畑		田		宅地	
萱芝		墓地			

9 (2009): 1-17.

佐藤量「国境を越える同窓会：植民地期大連の日本人学校同窓会の分析を通して」『中国東北文化研究の
広場』（「満洲国」文学研究会）1号（2009年）：103-114頁。

轟博志「朝鮮における日本人農業移民：東洋拓殖と不二農村の事例を中心として」米山裕・河原典史編『日
系人の経験と国際移動：在外日本人・移民の現代史』（人文書院，2007年），199-219頁。

轟博志「朝鮮における日本人農業移住の空間展開」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』（不
二出版，2008年），63-86頁。

山元貴継「日本統治時代における朝鮮半島・木浦府周辺の空間的変容：地籍資料の分析を中心に」『人文
地理』55：4（2003年）：24-45頁。